



## 二区周辺の昆虫と野鳥



発行:令和5年7月22日  
下諏訪町公民館 第二区分館

## はじめに

第二区分館では2021年、2022年の夏に昆虫の観察会を、2022年の春には探鳥会を行い、多くの方にご参加いただきました。

昆虫、野鳥共に身近な生き物ですが、機会がなければなかなか目を向けることがないものです。そんな中、幸いなことに昆虫の観察会の講師及び探鳥会の企画をさせていただくことができ、参加者の方々には意外なほど多くの生きものが近くに生息していることを実感していただくことができたと思っています。

また、その一環として今回身近にいる昆虫と野鳥について簡単なまとめを作成させていただくことになり、こうして形にすることができました。とにかく身近で見かけることが多いもの、目立つものに絞りこんだため多くの種類を紹介することができませんが、これを入り口として少しでもまわりにいる小さな生き物たちに興味を持っていただける方が増えていただければ幸いです。

最後に本企画に多大なご協力をいただきました、第二区分館の役員及び部員の方々に厚く御礼申し上げます。

第二区分館 研修部長 青木 由親

一昨年・昨年夏には「里山にどんな昆虫がいるのか探してみよう」という目的で昆虫観察会を、また昨年春には、長い間塩嶺の小鳥バスの解説をされた林正敏氏にもご協力いただき「二区にはどんな野鳥がいるのか観察してみよう」という目的で探鳥会を開催しました。各事業に参加できなかった皆さんにも二区周辺に棲む昆虫や野鳥を知っていただきたいとの思いから、観察時の説明用資料を基に、この度小冊子にして発刊することになりました。

今回の冊子では、二区・下諏訪町に住む昆虫や野鳥たちに焦点をあて、自然・昆虫写真家で、第二区分館研修部長でもある青木由親氏に写真・文章を提供いただき、企画室を中心に分館運営委員の想いを手作りでもまとめあげました。

下諏訪町は大自然に囲まれた歴史と文化、そして貴重な動植物の宝庫です。この冊子を手にも、またスマホやタブレットで第二区分館のホームページを開いていただきながら探訪していただくことを願うと共に、貴重な自然資源・遺産を皆さんで未来に長く残していただくことを心より願っています。

第二区分館長 山田 昌宏

## チョウの仲間

### ・アゲハチョウの仲間

二区内で観察できるアゲハチョウ類にはナミアゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、ウスバシロチョウがある。ナミアゲハやクロアゲハはサンショウやカラタチを食べるので特に身近に見られる。ウスバシロチョウは一般的なアゲハチョウのイメージとはちょっと違う種類で、春～初夏にかけてのみ見られる。



### ・シロチョウの仲間

シロチョウの仲間はモンシロチョウ、スジグロシロチョウ、キタキチョウ、モンキチョウ、スジボソヤマキチョウ、ツマキチョウなどが見られる。モンシロチョウは畑近辺に見られるが、栽培作物以外を食べられないため、深い山の中ではスジグロシロチョウにとってかわる。スジグロシロチョウ類にはスジグロシロチョウとヤマトスジグロシロチョウがいるがよく似ており区別は非常に難しい。スジボソヤマキチョウとキタキチョウは成虫で冬を越すので春早くから見る事ができる。モンキチョウはどこにでもいる最も普通に見かけるシロチョウ。ツマキチョウは年に一度、春にのみ姿を見せる。こうした春の一時期にしか姿を見せない生き物たちをスプリングエフェメラル（春の妖精）と呼ぶこともある。



・タテハチョウの仲間①（タテハチョウ亜科）

タテハチョウの仲間ではキタテハ、ルリタテハ、コムスジといった一般的な種類から、クジャクチョウ、シータテハ、ミドリヒョウモンなどの寒い地域を好む種類も少なからずみられる。山沿いではオオムラサキを見ることがあるが数は少ない。



キタテハ



ルリタテハ



コムスジ



クジャクチョウ



シータテハ



ミドリヒョウモン



オオムラサキ

・タテハチョウ科②（ジャノメチョウ亜科、マダラチョウ亜科、テングチョウ亜科）

ジャノメチョウとしてはヒメウラナミジャノメ、ジャノメチョウなどが見られる。桜城址などで時には優雅に舞うアサギマダラに出会うこともある。

テングチョウは成虫越冬をするため3月になれば暖かい日にいち早く姿を見せる。



ジャノメチョウ



アサギマダラ



テングチョウ

### ・シジミチョウ科

シジミチョウは小型で可愛らしいグループ。最もよく見かけるのはヤマトシジミで庭先のカタバミ周辺をちらちらと飛んでいる。ルリシジミやツバメシジミといった似た種類が別にいる。田畑の畔で元気よく飛び回っているオレンジのベニシジミもなじみ深い種類。秋になるとウラナシジミを見かけるようになるが、この種は長野県で冬を越すことができない。個性派としては南方系のウラギンシジミ、幼虫が肉食のゴイシシジミをまれに見かける。シジミチョウの幼虫はわらじ型で特徴的。



ヤマトシジミ



ツバメシジミ



ベニシジミ



ウラギンシジミ



ゴイシシジミ



ベニシジミ (幼虫)

### ・セセリチョウ科

セセリチョウの仲間には三角形のとがった姿が特徴的な一群。イチモンジセセリは最もよく見かけ、秋にその数を増す。ダイミョウセセリは山沿いの林縁に見られ、幼虫はヤマノイモの葉を食べる。雑木林周辺の草原では初夏にコチャバネセセリなどを見かける。



イチモンジセセリ



ダイミョウセセリ



コチャバネセセリ

### ガの仲間

ガの仲間は根本的にチョウの仲間と同じで確実に区別することはできない。日本で現在確認されているガの種類数は6000種以上で、これからもまだまだ新種が見つかる可能性が高いが、地味なものや似たものも多く、区別するのは難しい。

種類数が膨大なため姿かたちも実に多様で、秋によく見かけるクスサンやいると目立つオオミズアオ、スマートな形のスズメガ類やノメイガ類、真っ白で目立つシロヒトリ、高原に生息し大変美しいベニモンマダラ、黒いアゲハチョウに擬態するアゲハモドキ、丸まった枯葉そっくりなムラサキシヤチホコ、小さいが可愛らしいマドガ等、多岐にわたった形状をしている。



クスサン



オオミズアオ



クチバスズメ



マエアカスカシノメイガ



シロヒトリ



ベニモンマダラ



アゲハモドキ



ムラサキシチャホコ



マドガ

## 甲虫の仲間

甲虫類は大変に変化に富んでいるグループで見かける機会も多い。

### ・オサムシ類

美しいアオオサムシをよく見かける。また、開けた場所ではハンミョウやニワハンミョウを見かけることがある。水中にすむゲンゴロウ類ではコシマゲンゴロウをよく見かける。シテムシ類は動物の死骸を食べる種類が多く、ミミズに群がるオオヒラタシテムシが身近に見られる。



シナノアオオサムシ



ハンミョウ



ニワハンミョウ



コシマゲンゴロウ



オオヒラタシテムシ

・クワガタムシ類

最もよくみるのはコクワガタとスジクワガタで、アカアシクワガタとミヤマクワガタがそれに続く。ノコギリクワガタは滅多に見かけない。二区内ではないが、町内の標高が高いところではルリクワガタ類やツヤハダクワガタなども生息している。



コクワガタ



スジクワガタ



アカアシクワガタ



ミヤマクワガタ

・コガネムシ類

マメコガネやコアオハナムグリなどが特に目に付く類である。カブトムシは大変数が少なく、目にする機会は多くない。糞虫類ではセンチコガネが多い他、稀にツノコガネもいるようだ。



マメコガネ



コアオハナムグリ



セマダラコガネ



カブトムシ



センチコガネ



ツノコガネ



アオカナブン



シロテンハナムグリ

### ・そのほかのコウチュウの仲間

ジョウカイボンのカミキリムシに似ているが、触ると前翅が柔らかいのですぐにわかる。

ホタル類は近年ほとんど見ることができなくなった。たまに放流をしようとする話を聞くこともあるが、遺伝的に異なる他の地域から持ってきた生物を野外に放すようなことは環境破壊そのものであり、安易に行うことは避けねばならない。また、ホタルといっても発光する種は限られており、クロマドボタルのように幼虫は光るが成虫になると光らなくなる種もある。



ジョウカイボン



ゲンジボタル



クロマドボタル

コメツキムシをひっくり返してパチンと跳ねさせて遊んだことのある方も多いと思う。よく見かけるのは地味なサビキコリだが、春先のシモフリコメツキのように大型のものもある。タマムシ類は種類が少なく、小型のものがほとんど。初夏にタンポポに集まっているクロヒメヒラタタムシは観察しやすい。



サビキコリ



シモフリコメツキ



クロヒメヒラタタムシ

### ・テントウムシ類

なじみ深い虫だが、意外なほど種類が多い。身近な種類としてはナミテントウやナナホシテントウがいるが、ナミテントウは様々な模様をしているので、一見別種に見えることも多い。



ナミテントウ



ナナホシテントウ



カメノコテントウ



オオニジュウヤホシテントウ

一枚目の画像のものもすべてナミテントウである。カメノコテントウは日本最大のテントウムシの一種で、クルマハムシなどの幼虫などを食べる。テントウムシの中には植物を食べる者もあり、オオニジュウヤホシテントウなどは畑のナスやジャガイモの葉を食い荒らしてしまう。たまに“てんとうむしだまし”と呼ばれることもあるが、れっきとしたテントウムシの仲間だ。

キマワリは朽木や立木の幹によくついていて、クワガタ採りの際に見間違えて悔しい思いをすることもある。モモブトカミキリモドキは春先に花に来ている。ヒメツチハンミョウは秋と春に姿を見かけることがある。ツチハンミョウの仲間は体にカンタリジンという毒をもっており、刺激を受けると関節から体液を出して身を守る。体液が皮膚に付くと炎症を起こすので注意したほうが良い。



キマワリ



モモブトカミキリモドキ



ヒメツチハンミョウ

### ・カミキリムシの仲間

非常に種類が多く、木を齧るもの、花に来るもの、樹液に来るもの、枯れ木や朽木に来るものなど生態もさまざまである。花に来るアカハナカミキリ、木を齧るキボシカミキリやゴマダラカミキリ、枯れ木や朽木に来るルリボシカミキリやキスジトラカミキリ等が観察しやすい。



アカハナカミキリ



キボシカミキリ



ゴマダラカミキリ



ルリボシカミキリ



キスジトラカミキリ

草むらや道端の草木の葉上ではハムシやオトシブミが見つかる。イタドリハムシは道路わきのイタドリに、ヒメクロオトシブミは野草から庭のバラなどの葉っぱも丸めてしまう。ヒメシロコブゾウムシはウコギの生垣や、畑のウドの葉上でよく見かける。



イタドリハムシ



ヒメクロオトシブミ



ヒメシロコブゾウムシ

## ハチの仲間

ハチの仲間と言って思い浮かぶのはスズメバチやアシナガバチの類だろう。よく見かけるスズメバチはキロスズメバチ、コガタスズメバチあたりで、オオスズメバチはあまり多くない。人家周辺ではキアシナガバチ、コアシナガバチが多い。他にはセイヨウミツバチの他、トラマルハナバチやコマルハナバチ、クマバチなどのハナバチ類も目に付く。他の昆虫に寄生するハチは種類が多いうえに見分けも難しいが、その中ではカミキリムシに寄生するウマノオバチが特徴的で、体長の何倍もの長さの産卵管を持つので見間違えることがない。



キロスズメバチとコガタスズメバチ



キアシナガバチ



ウマノオバチ



トラマルハナバチ



キムネクマバチ

意外かもしれないがアリはハチの中の1グループ。よく見かける種類はクロヤマアリやクロオオアリ、アミメアリの他、アズマオオズアリ、ムネアカオオアリや稀にサムライアリなどが見られる。



クロヤマアリ



クロオオアリ



アミメアリ



アズマオオズアリ



ムネアカオオアリ



サムライアリ

## ハエ・アブの仲間

ハエ・アブの仲間も膨大な種類数を抱えるうえに生態が多岐にわたるため、一口にこうということではできないグループ。目につきやすいものとしては花に来るハナアブやピロウドツリアブ、他の虫をとらえるシオヤアブなどがあげられる。



ハナアブ



ピロウドツリアブ



シオヤアブ

## トンボの仲間

オツネトンボとホソミオツネトンボは成虫で冬を越すトンボで、暖かい年には1月でも飛ぶときがある。水辺にいる水色のトンボはシオカラトンボと一括りされやすいが、春先のみ出るシオヤトンボなど複数種いる。オニヤンマは日本で一番大きなトンボだが、小さな水路に好んで住んでいる。赤とんぼにも種類があり、代名詞であるアキアカネの他マユタテアカネやノシメトンボなどは比較的に見かける種類だ。



オツネトンボ



ホソミオツネトンボ



アサヒナカワトンボ



シオヤトンボ



シオカラトンボ



オニヤンマ



アキアカネ



マユタテアカネ



ノシメトンボ

## セミ・ヨコバイの仲間

夏の象徴のように思われているセミだが、実際には5月～9月まで鳴いている。5月後半ごろ、山からまるでヒグラシのような声が聞こえてきたらそれはエゾハルゼミの合唱だ。よく似たハルゼミも同じ時期に出てくるが、針葉樹の林にしかない。

夏のセミとして先陣を切るのはニイニイゼミとヒグラシ。ヒグラシは夏の終わりの印象が強いが、実際は比較的早い時期から鳴きだすセミだ。ついでエゾゼミ、アブラゼミと鳴きだし、真夏になるとミンミンゼミが増えてくる。他にツクツクボウシとチッチゼミもいるが、数が少なかったり聞き取りにくい声だったりするのであまり知られていない。また、稀にだがクマゼミの声が聞こえることもある。



エゾハルゼミ



ニイニイゼミ



ヒグラシ



アブラゼミ



ミンミンゼミ



エゾゼミ

ヨコバイの仲間が一番目につきやすいのはバナナ虫とも呼ばれるツマグロオオヨコバイ。マサキの植え込みに多い。春から初夏にかけて植物の茎に泡がついていたらアワフキムシの幼虫の巣だ。泡の中で成長した幼虫は外に出て羽化すると小さなセミのような姿になる。



ツマグロオオヨコバイ



アワフキムシの幼虫



マエキアワフキ

## カメムシの仲間

カメムシの仲間はくさい匂いを出すのであまり好かれていないが、とても興味深いグループだ。ぱっと頭に浮かぶようなカメムシから、意外な姿かたちをしたものも少なくない。タイコウチやミズカマキリ、アメンボ、マツモムシなどもカメムシの仲間だ。



アカスジキンカメムシ



ナガメ



ハサミツノカメムシ



タイコウチ



コセアカアメンボ



マツモムシ

## バッタの仲間

バッタの仲間は大きく分けてバッタの仲間、キリギリスの仲間、コオロギの仲間が含まれる。夏の昼間、草むらの中から「シャカシャカ…」という声が聞こえてきたらナキイナゴの声の可能性が高い。背の低い草むらから飛び出してくるのはコバネイナゴやオンブバッタだ。



ナキイナゴ



コバネイナゴ



オンブバッタ

夜の草むらから聞こえる声はキリギリスの仲間やツユムシの仲間で、触角が長く緑色の体をしていることが多い。



セスジツユムシ



ヤブキリ



ハヤシノウマオイ

コオロギの仲間にはエンマコオロギやツツレサセコオロギ、変わり種では地中で暮らすケラなどがある。



### バッタに近い昆虫たち

カマキリやゴキブリ、ナナフシ、ハサミムシなどは以前はバッタの仲間に含まれていたが、現在は違う仲間に分けられている。



## その他の昆虫たち

そのほかにもウスバカゲロウ仲間やシリアゲムシの仲間、ラクダムシ、イシノミの仲間などあまり知られていない仲間がいる。ヘビトンボは幼虫がマゴタロウムシと呼ばれ、川で暮らしている。

ウスバカゲロウは幼虫がアリジゴクと呼ばれ、乾いた砂に巣穴を作って暮らしている。シリアゲムシは林や草原に暮らす虫で、他の虫の死骸などを食べている。イシノミは森の中の朽木や岩の表面で暮らしている。



ウスバカゲロウ



ヤマトシリアゲ



ヘビトンボ



アリジゴク



ラクダムシ



イシノミの一種

## 虫たちの今昔 ～時代とのつながりを考える～

時代が変われば社会が変わる。社会が変われば環境も変わる。環境が変わればそこに住む昆虫たちも必然的に変わってくる。かつて普通だった昆虫たちにも姿を消したり大幅に数を減じてしまったりしたものは多いし、逆に新たに見られるようになったものもいる。

### ☆姿を消していく昆虫たち

姿を消した虫たちの多くはかつて耕作地周辺に多かったものや、草原に頼って生きてきたものが多い。代表的なものはタガメやゲンゴロウなどの水生昆虫（田んぼやため池の減少、農薬、光害、外来生物の侵入など）や、草原に住むヒョウモンチョウ類、ゴマシジミ、チャマダラセセリなどのチョウ類（草原、畔や法面の減少）などでその姿を消してしまった。



タガメ



ゲンゴロウ



ゴマシジミ

また、かつての動力源は牛馬に頼るところが大きかったが、昭和の高度経済成長に伴うモータリゼーションはこうした家畜類を駆逐し、その飼養が減るにつれて家畜の糞を利用していたダイコクコガネなどの糞虫類の減少につながったであろう。ダイコクコガネは今や本州以南で観察できる場所は極めて少なくなった。



ヒョウモンチョウ



チャマダラセセリ



ダイコクコガネ



メガネサナエ

かつて“エゴ”と呼ばれるヨシ帯が諏訪湖のあちこちに発達していたが、昭和期にこれらは刈り取られコンクリートの護岸へと姿を変えた。こうしたヨシ帯は生き物たちのゆりかごとなっていたはずで、諏訪湖のトンボ類にも影響はあっただろう。

諏訪湖の特徴的なトンボといえばメガネサナエであるが、これも減少しているようだ。分布は広いがその生態ゆえ確実に観察できる場所は少なく、諏訪湖と琵琶湖は有名な観察地だ。しかし地元に住んでいる人間にはなぜか日本全国どこにでもいるウチワヤンマばかりしか知っておらず、大変残念なところである。



マークオサムシ

また、変わったところではマークオサムシがある。このオサムシは 100 年以上前に” *Shimonosuwa, the Lake Suwa* ”の標本を元に日本から記録されたが、それ以後長野県で採集されておらず、幻の存在となっている（東北地方には生息している）。現在では誤認だった可能性も示唆されているが、確認しようにも生息環境である湿地そのものが消え去ってしまっておりその調査すらかなわぬ夢となってしまった。

### ☆新たに見られるようになった昆虫たち

姿を消した昆虫がいる一方で、新たに見られるようになった昆虫もいる。

最近話題になっているアカボシゴマダラは中国大陸から持ち込まれたものと考えられ、長野県下での記録が増えてきている。特定外来生物に指定されているので、飼育や生かしたままの移動などは法で禁止されているから気を付けた方が良い。



アカボシゴマダラ



インゲンテントウ

畑のインゲンを食い荒らしてしまうインゲンテントウはメキシコ原産で、暑さに弱いため山梨県韮崎市周辺から諏訪周辺の涼しい地域にかけてのみ帰化している昆虫だ。

公園のサクラで集団越冬するヨコツナサシガメの幼虫は 2000 年代に入ってから観察されるようになった。大陸原産と考えられており、かつては近畿以西にのみ分布するとされていた。



ヨコツナサシガメ

同じような分布を示していたのがツマグロヒョウモンで、こちらもすでによく見られるチョウの一種になってしまっている。

最近よく見かけるようになってきたのがマツヘリカメムシである。北米原産のカメムシで、その名の通りマツ類を寄主としている。以前は筆者宅に越冬のために侵入してくる

カメムシは圧倒的にクサギカメムシが多かったが、ここ数年はマツヘリカメムシの方が優勢にすら感じるようになった。

人間の活動範囲が拡大するにつれ、意図せずとも虫たちも一緒に移動してしまう。これからの時代、他国や他地域から侵入し、新たに見られるようになる昆虫は増えていくのかもしれない。



ツマグロヒョウモン (♀)



マツヘリカメムシ

● 下諏訪町 第二区周辺の野鳥

写真	説明	QRコード
	<p>カルガモ（カモ目カモ科） 留鳥 体長約 61 センチ 最もよく見かけるカモ類。</p>	
	<p>アオサギ（コウノトリ目サギ科） 留鳥 体長約 93 センチ 青みを帯びた体色を帯びたサギ。 山の中の水域でも見かける。</p>	
	<p>コサギ（コウノトリ目サギ科） 留鳥 体長約 61 センチ 白いサギ類の中では最もよく見かける種。 足指が黄色い。</p>	
	<p>トビ（タカ目タカ科） 留鳥 体長約 60 センチ 最もよく見かける猛禽。 飛んでいるときの尾羽はバチ型。</p>	
	<p>ノスリ（タカ目タカ科） 留鳥 体長約 55 センチ トビに次いでよく見かける猛禽。 飛んでいるときの尾羽は扇型。</p>	

- スマホでQRコードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QRコード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>フクロウ（フクロウ目フクロウ科） 留鳥 体長約 50 センチ 夜行性で「ホッホウ・ホッホウ・ゴロスケホウ」と鳴く。他のフクロウとしては小型で夏鳥のアオバズクなどがある。</p>	
	<p>キジみ（キジ目キジ科） 留鳥 体長約 60 センチ 里山に多い。 日本の国鳥。</p>	
	<p>キジバト（ハト目ハト科） 留鳥 体長約 33 センチ 日本在来のハト。 公園にいるドバトはヨーロッパで作出されたカワラバトの品種。</p>	
	<p>コゲラ（キツキ目キツキ科） 留鳥 体長約 15 センチ 小型のキツキ。 小さな林にも生息する。</p>	
	<p>アカゲラ（キツキ目キツキ科） 留鳥 体長約 24 センチ コゲラに次いでよく見かけるキツキ。</p>	

- スマホで QR コードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QR コード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>ツバメ（スズメ目ツバメ科） 夏鳥 体長約 17 センチ 住宅地周辺でよく見かける。 スズメと並ぶ身近な鳥</p>	
	<p>キセキレイ（スズメ目セキレイ科） 留鳥 体長約 20 センチ 沢沿いに多い。</p>	
	<p>ハクセキレイ（スズメ目セキレイ科） 留鳥 体長約 21 センチ 駐車場や河原でよく見かける。 尾羽を上下に動かすのはセキレイ類の 特徴</p>	
	<p>ヒヨドリ（スズメ目ヒヨドリ科） 留鳥 体長約 28 センチ 住宅地周辺に多い。 ピーヨピーヨの声でおなじみ。</p>	
	<p>モズ（スズメ目モズ科） 留鳥 体長約 20 センチ 一年中見かけるが、畑や草原など開けた環境を好む。</p>	

- スマホでQRコードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QRコード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>キレンジャク（スズメ目レンジャク科） 冬鳥 体長約 20 センチ ヒレンジャクとよく似る。 年によってわたってくる数に差がある。 尾羽の先は黄色。</p>	
	<p>ヒレンジャク（スズメ目レンジャク科） 冬鳥 体長約 18 センチ 群れでやってくる。 尾羽の先端が赤い。</p>	
	<p>カワガラス（スズメ目カワガラス科） 留鳥 体長約 22 センチ 山間の溪流や河川周辺で見られる。</p>	
	<p>ルリビタキ ♂（スズメ目ヒタキ科） 留鳥 体長約 14 センチ オスは青みを帯びて美しい。 冬場が観察しやすい。</p>	
	<p>ジョウビタキ ♂（スズメ目ツグミ科） 冬鳥 体長約 14 センチ 人家周辺で見られる冬鳥だが、最近は渡りをせず日本で繁殖しているのが確認されている。</p>	

- スマホで QR コードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QR コード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>シロハラ（スズメ目ツグミ科） 冬鳥 体長約 25 センチ 冬は群れを作らず単独で行動する。</p>	 <p>※QRコードは アカハラ</p>
	<p>ツグミ（スズメ目ツグミ科） 冬鳥 体長約 24 センチ 公園など見通しの良いところを好む</p>	
	<p>キビタキ（スズメ目ヒタキ科） 夏鳥 体長約 14 センチ 初夏に美しい声でさえずる。</p>	
	<p>オオルリ ♂（スズメ目ヒタキ科） 夏鳥 体長約 16 センチ 初夏に美しい声でさえずる。 その声は日本三大美声の一つに数えられる。</p>	
	<p>エナガ（スズメ目エナガ科） 留鳥 体長約 14 センチ 繁殖期以外はカラ類との混群をよくつくる。</p>	

- スマホでQRコードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QRコード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>シジュウカラ （スズメ目シジュウカラ科） 留鳥 体長約 15 センチ 身近でよく見られる鳥の一つ。</p>	
	<p>ヤマガラ（スズメ目シジュウカラ科） 留鳥 体長約 14 センチ ツツピーツツピーとよく鳴く。</p>	
	<p>メジロ（スズメ目メジロ科） 留鳥 体長約 12 センチ 人家周辺でよく見られる。</p>	
	<p>ホオジロ  ♂（スズメ目ホオジロ科） 留鳥 体長約 17 センチ 繁殖期以外には小群をつくる。 開けた明るい場所に多い。</p>	
	<p>カシラダカ（スズメ目ホオジロ科） 冬鳥 体長約 15 センチ アシ原や薄草原に多く、群れを作る。</p>	

- スマホで QR コードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QR コード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>アオジ（スズメ目ホオジロ科） 留鳥 体長約 16 センチ 林道や林などで見かける。</p>	
	<p>カワラヒワ（スズメ目アトリ科） 留鳥 体長約 15 センチ 繁殖期以外は群れで行動し、飛ぶときに翅の黄色が目立つ。</p>	
	<p>ベニマシコ（スズメ目アトリ科） 漂鳥 体長約 15 センチ 冬以外には観察しにくいですが、冬場は人家周辺まで出てくるようになる。</p>	
	<p>スズメ（スズメ目ハタオリドリ科） 留鳥 体長約 14 センチ 住宅街から山地の人家などまで広く分布。</p>	
	<p>ムクドリ（スズメ目ムクドリ科） 留鳥 体長約 24 センチ 都市部にも多く、ねぐらに群れる。</p>	

- スマホでQRコードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QRコード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

写真	説明	QRコード
	<p>オナガ（スズメ目カラス科） 留鳥 体長約 37 センチ 群れを作る。大きな声で鳴く。</p>	
	<p>ハシボソガラス（スズメ目カラス科） 留鳥 体長約 50 センチ 市街地や諏訪湖周辺でよく見られる。 くちばしは細い。声は濁る。</p>	
	<p>ハシブトガラス（スズメ目カラス科） 留鳥 体長約 57 センチ 都市部に多いが、深い森林にも住む。 嘴は太く、額が盛り上がる。 声は濁らない</p>	
<p>他の野鳥のことを知りたい場合はこちらのサイトから検索してね ホームページ：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」 <a href="https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/">https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/</a></p>		

- スマホで QR コードを読み取ると、鳥の詳しい説明や、鳴き声を聞くことができます。
- QR コード【出典：サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」】

◆サントリーの愛鳥活動「日本の鳥百科」HP リンクの掲載については、サントリーHD 株式会社より掲載許諾いただいております。



見ることは 知ることだ。

Jean-Henri Casimir Fabre (ジャン=アンリ・カジミール・ファーブル)



## 青木 由親 プロフィール

下諏訪町小湯の上生まれ。東京農業大学出身。自然・昆虫写真家。  
諏訪地方を拠点に主に昆虫の生態写真に取り組み、各種書籍への写真提供や  
テレビ番組の映像制作にも携わっている。

### 著書

- ・「うまれたよ！ハンミョウ」よみきかせいきものしゃしんえほん：岩崎書店
- ・「バッタ」しゃしん絵本 小さな生きものの春夏秋冬：ポプラ社

### 講座

- ・令和4年度下諏訪町公民館町民大学 「小さな隣人 諏訪の昆虫たち」  
講座の様子はYouTubeでも配信されております。  
QRコードからスマホでも見るすることができます。

<https://www.youtube.com/watch?v=uow4Ln9ypGY>



### 「二区周辺の昆虫と野鳥」

### 発行 第二区分館 企画室

順不同

分館長 山田 昌宏  
副分館長 小口 芳孝  
広報部長 高木 範明  
文化部長 谷口 和之  
研修部長 青木 由親  
体レク部長 高木 克彦

企画室長 山田 貞幸  
主 事 両角 京子  
副部長 栗林 洋斗  
副部長 宮坂 みどり  
副部長 松本 恵美子  
副部長 山邊 奈美

写真・文 青木 由親

発行責任者 山田 昌宏 編集責任者 高木 範明

☆第二区分館ホームページはこちらのQRコードから →





花見新道のミンミンゼミ